



鍬塚昭三先生を偲んで

名古屋大学名誉教授鍬塚昭三先生は、平成 17 年 12 月 11 日にご逝去されました。ここに故人のご功績を偲び謹んで哀悼の意を表します。

鍬塚昭三先生は、昭和 3 年 7 月 19 日、愛知県にお生まれになり、昭和 28 年 3 月九州大学農学部をご卒業後、同 29 年 4 月から同 41 年 8 月まで九州大学農学部助手（この間ウィスコンシン大学およびカリフォルニア大学に博士研究員として留学）、同 41 年 9 月から同 44 年 12 月まで理化学研究所研究員として、生物化学、天然物有機化学、農薬化学の分野でご活躍されました。昭和 44 年 12 月に名古屋大学農学部助教授（土壌学研究室）に着任され、同 57 年 2 月教授に昇任、平成 4 年 3 月に定年退官されました。名古屋大学ご着任後は主な研究分野を土壌学・環境化学分野に継承発展され、数多くの優れた研究結果を挙げてこられました。また、定年退官後も東京農業大学客員教授、および多くの各種公的機関の委員としてご活躍を続けてこられました。

特に土壌中の農薬の動態の研究につきましては、除草剤を中心に約 20 種の農薬の土壌中での分解速度と土壌の性質・環境条件との関係、土壌中における分解経路、収着・移動、土壌微生物や植物への影響を解明されました。土壌中での農薬の運命に関しては、試験方法を確立するところから始まって、放射性標識化合物を用いたトレーサー試験や GC-MS 等の機器による代謝産物の構造決定や、土壌中の腐植に結合した Bound residue の解析まで、多様な有機化

学的手法・土壌学的手法を駆使して研究されました。さらに、土壌中の農薬分解微生物の性質および挙動に関する研究では、農薬反復添加に伴う農薬分解微生物の集積と分解プラスミド遺伝子の安定性解析という先駆的な研究も進められました。これらのご業績により、昭和 52 年には「土壌および植物中における除草剤の代謝・分解および行動に関する研究」で日本農薬学会賞を受賞され、ついで昭和 63 年には「天然および合成有機物の土壌中における動態および挙動に関する研究」で日本土壌肥料学会賞、さらに「土壌環境中における農薬の代謝・分解および行動に関する研究」で平成 2 年日本農学賞および読売農学賞を受賞されております。

本学会におきましては、発足当時より見里朝正先生、松中昭一先生、宮本純之先生、山本 出先生らとともに学会の会則、細則、事業計画、予算などの原案作りから設立総会、設立大会まで学会設立の中心役として活躍されました。その後も、常任評議員、編集委員、日本学術会議第 5 回国際農薬化学会議（京都）運営委員会委員などをつとめられ、学会活動の向上と発展に尽力されました。学会の小研究会の一つである農薬環境科学研究会は、鍬塚先生が昭和 51 年に宮城県川渡セミナーハウスで非公開の勉強会としてスタートしたのですが、農薬の環境科学の重要性から多くの方々の賛同を得て小研究会となりました。現在では毎年 100 名を超える参加者のある研究会に発展し、平成 17 年度で第 23 回目の研究会を開催するに至っています。これらの功績

により、平成元年度日本農薬学会功労賞および望月喜多司記念功労賞を受賞されました。

また農林水産省農業資材審議会専門委員として、昭和46年改正の農薬取締法に基づく「農薬土壌残留試験法」に関する環境庁告示（昭和53年）の制定に参画されると共に、農林水産省および環境庁の各種検討会委員、愛知県公害対策審議会専門委員および同審議会委員（土壌部会長）、同県環境影響評価審査会議構成員、同県公害審査会委員、名古屋市公害対策審議会専門委員を歴任され、国および地方自治体の環境行政の発展に寄与されました。これらの功績により、平成3年環境庁長官表彰を受けられました。

鍬塚先生のお人柄は、とても暖かで面倒見のよい先生とすることができます。1960年代のカリフォルニア大学バークレー校のカシダ研究室には、鍬塚先生とともに西澤吉彦氏（住友化学）、深見順一先生（理研）、塚本増久先生（阪大）という、後の日本農薬学会を代表するそうそうたるメンバーが在籍しましたが、山本 出先生（東京農大）が新人として到着された際には、生活の面倒から実験の手ほど

きまで、鍬塚先生が細々と面倒をみられたと、お人柄を示すエピソードが残っています。

そのお人柄で後進の育成にも大変ご尽力され、学内に限らず、学外でも数多くの大学の非常勤講師として広く学生のご指導にあたられました。鍬塚先生は、非常に厳しい先生であるとともに、一生懸命な人に対しては暖かく見守り、「自分の学問をやりなさい。」と各自の個性を生かす指導をされてこられました。日本農薬学会でも、農薬をめぐる多様な研究者の背景や考え方を尊重しながら、その科学的発展を心より願っておられました。鍬塚先生と交流をもたれた全ての方が、それぞれご発展されることが一番の鍬塚先生への恩返しになることと信じます。最後に、先生の生前のご指導・ご薫陶に対して深甚なる感謝の意を表するとともに、心からご冥福をお祈り申し上げます。

平成18年4月

片山新太（名古屋大学エコトピア科学研究所）